

あいびき

堀辰雄

青空文庫

…：一つのこみち小径が生い茂った花と草とにおお掩われて殆ど消えそう
になっていたが、それでもどうやら僅かにその跡らしいものだけ
を残して、曲りながらその空家へと人を導くのである。もう人が
住まなくなつてから余程になるのかも知れぬ。それまで西洋人の
住まっていたらしいことは、そのささやかなみかげいし御影石の間には嵌め
こまれた標札にかすかに A. ERSKINE と横文字の読めるのでも知
られる。

その空家は丁度或るやや急な傾斜をもつた坂道の中腹にあつた。
一たいに坂道というものがどれでも多少人を夢見心地にさせる性
質のものである。そういう坂道の中途まで来てふと足を止めた瞬

間、ひよいとそんな荒れ果てた庭園が目に入るので、人はますますその空家を何だか夢の中でも見ているような気がするのである。

或る日のこと、その坂道を一人の少年と一人の少女とが互いに肩をすりあわせるようにして降りてきた。小さな恋人たちなのかも知れない。そう云えば、さつきから自分等のための *love-scene* によいような場所をさんざ捜しまわっているのだが、それがどうしても見つからないですっかり困ってしまったような二人に見えないこともない。——

そんな二人がその坂の中途まで下りて来て、ふと足を止めて、そういう絵のような空家とその庭とを目に入れたのである。それ

を見ると、二人は互いに目と目とでこんな会話をしたようだった。「ここなら誰にも見られっこはあるまい」「ええ、私もそう思うの……」

そう決めたのか、二人はその坂の中腹から彼等の脊ぐらゐある雑草をかき分けながらその空家の庭へずんずんはいつて行つた。ちよつと不安そうな眼つきで横文字の書いてある標札をちらりと見ながら。……

その庭園の奥ぶかくには、彼等が名前を知らないような花がどつさり咲いていた。少年はその一つの叢くさむらを指しながら、

「やあ、薔薇ばらが咲いていらあ……」と、いくぶん上ずつた声で云つた。

「あら、あれは薔薇じゃありませんわ」少女の声はまだいくらか少年よりも落着いている。「あれは蛇へびいちご 苺いちごよ。あなたは花ささえ見れば何でも薔薇だと思ふ人ね……」

「そうかなあ……」

少年はすこし不満そうに見える。それから二人は黙つたままその空家のまわりを一巡して見た。窓硝子まどガラスがところどころ破れている。が、その破れ目から二人がいくら脊伸びをして覗のぞいて見ても、ひっそりと垂れている埃ほこりまみれのカーテンにさえぎられて、その中の様子はよく見えなかった。それでも台所のところなどは内部がちらりと見えた。そこなどはいろんな台所道具が雑然と散らかつていて、中には倒れたまんまのものもあり、そしてそれらのも

のは一面にこぼれた壁土のようなもので埋もれていた。どうやら震災の時からそっくりそのままにされているらしい。この家の地主である外国人は震災の時死んでしまったかも知れない。——二人はその空家を垣の中途から最初見たときふと彼等の心に浮んだ或る考えをいつか忘れてしまったかのように、そんなことばかりしやべり合っている。

が、その家の裏手に、その庭園から丁度露台へ上るような工合にして直接にその家の二階へ通じているらしい、木蔭きかげのからんだ洋風の階段を見出した時に、少年よりいくぶん早熟ませているらしい少女は思い切ったように言った。

「ちよつとあれへ上つて見ないこと？」

「うん……」少年は生返事をしている。

「そんなら私が先へ行くわ……」

それでもと云いかねて、やはり少年は自分が先に立ってその木
蔭のからだ階段をすこし危なっかしそうな足つきで上って行っ
た。が、その中途まで上ったかと思うと、少年は急に足を止めた。
その壁の上に彼の顔をあか赧くするような落書の描いてあるのを発
見したからである。少年はくるりと踵きびすを返すと、

「やっぱり悪いから止よそうよ」と云いながら、ずんずん一人で先
に降りてしまった。少女はそこに一人きり取り残されて、しばらく
呆気あつけにとられているように見えたが、やがて彼女も彼のあとを
追った。

そうしてそのまま二人は彼等の Love-scene には持つてこいに見えたその空家の庭からとうとう立ち去ったのである。

少年はその家を遠ざかるにつれ、つくづく自分に冒険心の足りないことを悲しむばかりであった。そうしてその辺の外人居留地かも知れない洋館ばかりの立ち並んだ見知らない町の中を少女と肩をならべて歩きながら、そういう弱虫の自分に対して自分自身で腹を立ててでもいるかのように、急に何時いつになくおしやべりになった。

「君、メリメエという人の小説を読んだことがある？」

「いいえ、ないわ」

「そうかい、僕はその人の小説がとても好きなんだがなあ……僕

はその人の短篇でね、『マダム・ルクレエス街』というのを読んだことがあるんだ……その中にね、丁度、今みたいな家が出てくるんだぜ、それは伊太利イタリイの話だけれど……ところがその空家の二階の長椅子がね、一つだけ埃がちつとも溜たまっていなくて、何だか始終人に使われている見たいだったんだ……実はそこでね、毎晩あるお姫様がその恋人とあいびきをしていたということが後でわかるんだよ。そう云えば、今のあそこの二階もね、僕は何だかそんな秘密でもありそうな気がしてならなかったよ……やはりさつき上つて見ればよかつたなあ……」

「まあ……」少女はそんな突拍子もない少年の話を聴きながら顔を真っ赤にしていた。それに気がつく、少年も顔を真っ赤にし

た。——そうしてしばらく気まり悪そうに二人は黙って歩いてたが、今度は少女の方が口をきいた。

「あなたは随分空想家ね」

「そうかなあ……」どうもこれは少年の口癖のように見える。

気がついて見ると、いつの間にか二人の前には五六人の、支那人の子供たちが立ちはだかつて冷やかすように彼等を見上げているのである。二人は一層まごまごした。いつの間にこんな支那人町へなど足を踏み入れたのかしら。……

それは何処どこの町にもほかほかと日の当たっているような、何となくうつとりするような、五月の或る午後のことであつた。

青空文庫情報

底本：「堀辰雄集 新潮日本文学16」新潮社

1969（昭和44）年11月12日発行

1992（平成4）年5月20日16刷

入力：横尾、近藤

校正：松永正敏

2003年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

あいびき

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>